安部公房「デンドロカカリヤ」の素材

佐々木幸喜

はじめに

本稿で取り上げる「デンドロカカリヤ」は、安部公房（一九二四―一九九三）の初期作品の一つであり、一九四九年八月に『表現』に掲載された。[1] 本作は、一行空きによって全体が三一の部分に分けられ、語り手「ぼく」が「君」に「コモン君がデンドロカカリヤになった話」を話して聞かせるという形式をとる。そのあらすじは、以下のとおり。

「春先」、「コモン君」が「路端の石を蹴とばした」。そのとき、「コモン君はふと心の中で何か植物みたいなものが生えてくるように」感じる。しかし、「心地良い不快感を押切つて」、「コモン君」は人に戻る（九）。そこから「一年たつて翌年、やつぱり春」、同じ「病気が再発」する（一二）。「K嬢」から受け取った手紙で始まるエピソードが、そのきっかけとなる。手紙には、「こないだの店」で待ち合わせて「一緒に逃げてほしい」と書いてあった（一四）。「コモン君」は「K嬢」からの手紙に従い、「こないだの店」に行く（一八）。しかし店に入ってきたのは、「K嬢」ではなく「あの人」であった（二〇）。「思はず空を見上げてゐた」「コモン君」は「全身ほとんど植物になつてゐ」た（二一）。人間に戻ったとき、「約束の時間はすぎ」ており、「あの人」も「彼女」もおらず、「コモン君は逃げるように店を出た」（二二）。「急に疲れを覚えた」「コモン君」は、「このまま植物になつてしまはうと」「決心」する（二三）。しかし、そこに男が現れ、「ナイフを振上げ」「採集」しようとしたが、「コモン君は人間の姿で忽然と現はれ」た（二四）。「コモン君」は、「ぼくにゆづつてくれたはずの」家に戻る。「ぼく」は家を出ることにし、「コモン君」が駅まで見送る。そこで「コモン君」に話して聞かせるのが、「ダンテの神曲」である。神曲には「自殺した人間が樹になる」話が収められているというのである（二五）。さて、

「三日」続けて、「コモン君」は「K嬢」を探していた。「コモン君」は「K嬢」が「あの人」と一緒にいるところに出くわす。「部屋に帰」った「コモン君」は手紙を燃やす。手紙を燃やす煙が消えたとき、「変形の発作」が「コモン君」を襲う。「ゼウス一族の仕業にちがひない」と考えた「コモン君」は「ギリシヤ神話を手に入れ」る（二七）。「ある日」、「コモン君」宛に「H植物園長」から手紙が届く（二九）。「コモン君」は植物園長を「アルピイエ」だと考える。植物園長は、「コモン君」に「ティミリヤーゼフの植物の生活」の内容を聞かせ、「科学的に考へ」ることを促す（三〇）。「ある朝、まだ薄暗いころ」、「コモン君」は植物園に向かう。「アルピイエを殺」し、「温室の中に閉込められてゐる仲間を救」うためである。しかし、「コモン君」の企ては失敗。「コモン君」は「園長と助手」に「無理矢理大きな植木鉢に乗」せられる。「眼を閉ぢ」「太陽の方へ静かに両手を差しのべた」とたん、「コモン君は消え」、そのかわりに「樹が立つ」ていた。園長は、学名を書いたカードを「コモン君の幹に、大きな鉈でしつかりとめた」（三一）。

「デンドロカカリヤ」では、作中人物たちそれぞれが文献を取り上げ、それを用いながら自身の考えを表明していく。本稿が目指すのは、「デンドロカカリヤ」の成立に関わった素材（材源）がどのように組み合わされているかを明らかにすることである。具体的な問いは、「植物に関する資料がなぜ用いられたのか」と「なぜデンドロカカリヤが選ばれたのか」である。

一　植物に関する資料と作中人物たち：語り手「ぼく」

まずは、語り手「ぼく」がどのような資料を拠り所としているかを確認していきたい。語り手「ぼく」は作中で見られる「病気」を「植物病」と捉える。これが、植物にまつわる最初の記述である。これに関し、田中裕之（一九九〇）[2]が、安部公房の随筆「シュールリアリズム批判」（『みづゑ』、一九四九年八月）を引き合いに出し、「プシコノイローゼ（精神神経症）」に着想を得たのではないかと指摘している。補足すると、この「小論」は、「現代絵画」において「シュールリアリズム」が取り上げられるに至った「必然性を精神構造の分析に於てとらえ」（「シュールリアリズム批判」）ることに主眼を置くものであるが、ここには、精神科医・三浦岱栄（一九〇一―一九九五）の名が見える。該当個所を引用して示す。

> プシコノイローゼ―これは大別してヒステリーと神経質とに分類される症候群であり、疾患というよりは三浦岱栄博士の主張のごとく、まさに《一個の世界》であると考えられ、更にすべての人間に現われうる外界刺戟に対する一反応現象、あるいは反応する人間の傾向であると考えるのが最近の学説である。

傍線を引いた個所一つ目「三浦岱栄博士の主張のごとく、まさに《一個の世界》である」に関して、安部は、三浦岱栄『神経病診断治療学』（一九三九年四月、鳳鳴堂書店）の次の記述を参照したと考えられる。第九版が一九四九年三月に出ており、安部はこれを読んだか。次の引用は、第九版からである。第二八章「主なる精神症候群とその診断、治療」にある記述である。

之は神経衰弱・神経質・強迫神経症・ヒステリー等を総括する症候群であるが、精神神経症 Psychoneurose とも呼ばれる。フロイドによつて創始せられた精神分析学 Psychoanalyse は精神神経症の問題を根本的に改変せしめ、茲に神経症学 Neurosenlehre なる特殊科目をさへ生むに至つた。実際精神神経症は一つの疾患といふより、一箇の世界であると思ふ。

「シュールリアリズム批判」の引用で示した傍線二つ目「すべての人間に現われうる外界刺戟に対する一反応現象」については、三浦の著作には記述が確認できず、安部は他の書籍も参照した可能性がある。それが杉田直樹『ヒステリイ』（一九四七年四月、日本医書出版）である。次の引用は、第一章「ヒステリイ」の発生」の記述である。

つまり「ヒステリイ」なる疾患の範囲が、今尚明確に立てられてゐず、却つて「ヒステリイ」は、一箇の疾病単位ではなく、寧ろ症状群（ママ）に外ならないとか、又は外界刺戟に対する一反応症状を指して云ふのに過ぎないとか、種々本病の本態に就いての異説が沢山に行はれてゐるのである。

ここで押さえておきたいのは、『神経病診断治療学』と類似の表現が「デンドロカカリヤ」に見られることである。引用し示す。

おや、どうしたの？　ああ、発作だね。言つてる先から植物病だね。構はないから体をゆすりたまへよ。しつかり顔をおさへて、ひつくりかへらないやうに、そして力一杯顔に全身の動きを想出させるやうにするんだ。いいから、人のことなんか気にしないでいい。みんな知つてる。知りすぎてるから、余計に知らん顔なのさ。ぼくの考へでは、これはもう病気といふより、一つの世界、とくにぼくらの世紀のね。

（五）

この個所が、作品冒頭で「ぼくの考へ」として示されることに注意したい。語り手「ぼく」は、安部が「最近の学説」（前掲「シュールリアリズム批判」）と挙げる「プシコノイローゼ」の

位置づけを踏まえ発言しているといえる。三浦が「精神神経症」と記す個所は、語り手「ぼく」により「植物病」に置き換えられている。また、作中、「注意をうながしておいたとほり」（九）や「ぼくの言つたとほり」（二一）、「ぼくが最初に注意しておいたとほり」（二二）といったように、自身の考えを提示することで話題を進めていくことにも注意したい。語り手「ぼく」が後に「暗示」という表現を使うこの方法は、「保護色」（生前未発表、『全集』第三巻に収録）あるいは「餓えた皮膚」（『文學界』、一九五一年一〇月。後、「飢えた皮膚」と改題）でも用いられる。もう一つ押さえておきたいことは、ヒステリーが植物神経のことにも関連して述べられていることである。「シュールリアリズム批判」では、植物神経のことが出ているが、前掲『神経病診断治療学』の第三章「反射機能の障礙と之が診断的意義」では、次のように書かれている。

植物神経は就中反射的に活動して居ることが特徴であるが、狭義の神経病学に於てはこの植物性反射は従来余り重要なる位置を占めて居なかつた。併しながら、神経病学も一般医学との密接なる関聯に於てのみ正しく理解されるといふ最近の傾向に於ては、植物神経反射こそは今後益々注目されて然るべきものであらう。

三浦、杉田（一八八七―一九四九）はいずれも精神科医であった。安部が彼らの考えを吸収した背景には、安部自身の関心と合致していたことが関わっているといえよう。谷真介［編］『安部公房評伝年譜』（二〇〇二年七月、新泉社）からも知られるように、安部は元々、大学卒業後は精神科医を目指していた。「植物神経」のことには大学でも触れた可能性があり、「植物」と名のつく「植物神経」が本作の構想につながっていたと考える。そして、この知識は学術的なところから吸収していた。もう一つ、なぜ「シュールリアリズム」に関心を寄せたのか。その手がかりとして随筆を一つ挙げておきたい。この随筆「僕の小説の方法論」（『希望（L'ESPOIR）』一九五二年一月）は、「デンドロカカリヤ」の少し後に書かれたもので、次のような主張が確認できる。安部は「フロイド」の指摘を「科学的な方法」と考えていた。「フロイド」は前掲「シュールリアリズム批判」でも、「プシコノイローゼ」は「フロイドによって展開された」ものであると示されるほか、「フロイドのいう《疾病への逃避》の様々な現れにすぎない」[3]などのように取り上げられており、継続して関心を持っていたものと推測される。翻って「僕の小説の方法論」において、安部が「フロイド」を引きつつ、「労働者を中心とする大衆の中に」「現在のリアリズムを確立」する基盤があると考えていることは注目したい。

自然主義リアリズムの克服としてのシュール・リアリズムを、われわれはもっと再評価しなければなるまい。素朴な

自然が相手でなく、複雑な社会を意識した現代の作家達は、夫々、その方法の模索をやっている。シュール・リアリズムもその流れの中に生れた代表的な方法論であった。それは現実を、意識の表層に現れた結果だけで見ずに、もっと意識下の領域にまで掘下げて追求しようとする科学的な方法（フロイド）にもとづいていた。／〔略〕真に、社会を、芸術のジャンルに於いて捉える方法、現在のリアリズムを確立しなければならないのだ。それには、それが育つ基盤が、労働者を中心とする大衆の中にあることを再確認しなければならぬだろう。

さて、語り手「ぼく」が拠り所とする書物として名前の挙がっているものとして、他の文献に目を向けたい。それが、「ダンテの神曲」である。作中、語り手「ぼく」は次のように説明する。

おや、ダンテの神曲を知らないの？　ああ、たいして気にとめなかつたといふんだね。さうだらう。コモン君も実はぼくの暗示でびつくりしてしまつたのさ。成程さうだつたといふわけで、ぼくと別れると早速近くの図書館に行つてみた。／地獄篇第十三歌の、ピエエル・デルラ・ギイニアの物語は、いたくコモン君を驚かしたよ。『しかしてこの暗き森のかなたこなたに、ひとつびとつの肉体は、そを虐げし魂なる、いばらの上に懸けらるべし。』〔略〕ダンテによれば此処は第七獄の第二の円であり、自殺者が受ける罰だといふのだが……。フェデリイゴの心の鍵を二つながらに持つたピエエル・デルラ・ギイニアとは較ぶべくもないとしても、ミノスに裁かれるほんの一寸した理由でも想出せれば納得できたのだらうが。やはりコモン君には、何故自分が自殺者の罪に問はれなければならないのか、さつぱり分らなかつた。しかし、全篇をもつとよく注意して読むと、いくらか理解出来るやうでもあつた。つまり、地獄に堕ちた人間は、地獄にあつても決して罪の意識を持たないものなのだ。ここには罰だけがあつて罪はない。してみると、とコモン君は判断せざるを得なかつたわけさ。つまり俺は知らずに、既に自殺してしまつてゐたのかもしれないとね。

（二六）

この個所について、蘆田英治（二〇〇五）[4]は、「安部が『デンドロカカリヤ』で直截参照しているのは、生田長江訳である。新潮社〈世界文学全集1〉、一九二九・八。新潮文庫、一九三四年、もあ」ると指摘し、また、糸賀寛（二〇二四）[5]は、その六四―六五頁が「デンドロカカリヤ」に引用されていると指摘する。佐々木幸喜（二〇二四）[6]でも触れたとおり、前掲『安部公房評伝年譜』によれば、新潮社版『世界文学全集』は第一書房版『近代劇全集』（全四三巻）とともに、安部の「自宅にあ」っ

た。生田長江訳を確認すると、「デンドロカカリヤ」にある語彙や表現と一致しているため、蘆田と糸賀の指摘は正しい。それでは、ダンテ『神曲』（生田長江［訳］、『世界文学全集』第一巻、一九二九年八月、新潮社）地獄篇「第十三歌」＝第七獄（自己に対する暴行者）第二円」が「デンドロカカリヤ」に引かれたのはなぜか。その一つに、「ピエエル・デルラ・ギイニア」の存在があったのではないか。「デンドロカカリヤ」で、「較ぶべくもない」として名前の挙がる「ピエエル・デルラ・ギイニア」は、『神曲』地獄篇「第十三歌＝第七獄（自己に対する暴行者）第二円」で次のように注記される。六一―六二頁の記述である。

一一九〇年の頃カプアにて下賤の家の子として生る。秀才にして勤勉なりしかば早くその材を認められ、ボロニアに学びて後皇帝フェデリイゴ第二世の顧問官となれり。二十余年間その寵を専らにせしが、一二四八年身に憶えなき反逆の罪に問はれて投獄せられ且つ両眼を潰されしが翌四九年五月遂に自ら死せり。又、詩文を能くし、今に残れるものもありといふ。

傍線を引いた個所、すなわち「詩文」に、安部は自身との類似点を見出したか。「デンドロカカリヤ」を発表する二年前の一九四七年、安部は、ガリ版刷り詩集『無名詩集』を自費出版する。谷真介の整理によると、この詩集には、「詩十二編、散文詩一編、エッセイ一編」[7]が収められる。当時のことについて、安部は随筆「リルケ：苦痛の記憶・その後」[8]に回想を残す。その随筆では、『『終りし道の標べに』（一九四八年）以前に、ぼくにも人並みに詩人の時代があって、『無名詩集』と名乗る、まさしくリルケもどきの、ガリバン（ママ）刷りの自費出版の詩集がある」と述懐しており、これに関して千葉宣一が頒価を下げても売れ行きが不調だったことを証言している。[9]鳥羽耕史（二〇二四）は、安部の伝記として、この詩集を『マルテの手記』を訳した大山定一と詩人・映画評論家の長江道太郎にも送ったが、反応はなかったらしい。この反響と人気のなさで、公房は詩人の道を断念したようだ」とまとめる。[10]『安部公房全集』（全三〇巻、一九九七年七月―二〇〇九年三月、新潮社）を確認すると、安部が最後に書いた詩と考えられるのは、一九四九年三月一五日と記録される「世紀の歌」（生前未発表、『全集』第二巻所収）である。[11]さらに、『神曲』地獄篇の「樹」が「自殺者の理性並に官能の作用を失へる状を表はせり」と説明されることも見逃せない。また、次の個所も引用し見ておきたい。前掲『神曲』地獄篇、六三頁である。

我［ピエエル・デルラ・ギイニアのこと］は詩人に言ふ、「我が心を充ち足らはすべしと汝の思ふことを、なんぢ我に代りて再び問へ。胸にせまれる憐れさの故に、我はその事を為し得ざればなり。／この故に彼は再び口を開きて言ふ、

「囚はれたる魂よ、この人は汝の言葉の請ひ求むるところを、汝の為めによろこびて為すべければ、ねがはくは更に告げよかし。如何にしてこれ等の木瘤の中に魂の繋がれたるかを。又告げ得べくは、その魂の斯かる肢体より、釈き放たるることのありやなしやを告げよ。」／この時幹は激しく息を吹き出でしが、その息つひに次ぎの如き言葉となりて言ふ、「手短かに我は答をなさむ。／苛立ち狂へる魂の、肉体より己自らを引き裂きて、その肉体を棄て去るや否や、ミノスはこれを第七の獄に送る。／そは森の中に落ち来るなれど、いづこにと選み定められたる処もなく、命運の投げ入るる処に置かれて、そこに麦粒の如く芽を出し、若枝を出し、つひに一本の樹木となる。／アルピイエ〔鳥の形をせる怪物〕であり、「多く強欲者或は人の膏血を絞る者の意に用ゐられるれども、ダンテは今これを自殺者を苦しむものと」みなす〕はやがてその葉を食みて痛みを与へ、またその痛みに窓を与ふ。／他の者等と同じく我等もまた我等の衣を獲むとて帰り行くべし。されど、それを再び着ることを得む為めにはあらず。自ら脱ぎすてし物を纏ふは、正しき事にあらざればなり。／それを我等はこの処に曳き来らむ。しかしてこの暗き森のかなた此方に、ひとつびとつの肉体は、そを虐げし魂なる、荊棘の上に懸けらるべし。」

ここで、素材としての「神曲」の意味を考えたい。「コモン君」は語り手「ぼく」の「暗示」により、「ダンテの神曲」に接する。『神曲』の「地獄篇第十三歌」において、「樹」は「自殺者の理性並に官能の作用を失へる状を表」すものと説明される。「コモン君」は、植物に変形する自分の境遇と「ピエエル・デルラ・ギイニア」のそれとを重ね合わせる。「ピエエル・デルラ・ギイニア」は、「フェデリイゴ第二世の顧問官」を務めた人物であり、「詩文を能くし」た人物であったが、「嫉妬」により、「魂」を「苛立ち狂へる」ものとしたために、「大なる荊棘」に「成り果てた」人物として描かれる。「コモン君」は自身を「ピエエル・デルラ・ギイニア」と「較ぶべくもない」としつつ、「俺は知らずに、既に自殺してしまつてゐるのかもしれない」と考える。「コモン君」の考えは、語り手「ぼく」の視点を通して語られる。「コモン君」は、「全篇」を「よく読む」ことで「自分が自殺者の罪に問」われることを受け入れる。その姿勢は、『神曲』の「ひとつびとつの肉体は、そを虐げし魂なる、荊棘の上に懸けらるべし」という結末が自分の身にもあてはまることを受け入れていることを表すといえる。(12)

二　植物に関する資料と作中人物たち：「H植物園長」

次に見ていくのは、「H植物園長」の発言である。「H植物園長」は、「ティミリヤーゼフの植物の生活」を持ち出す。作品

本文において、「H植物園長」は次のように説明を加えていく。

デンドロカカリヤさん、ギリシヤ神話とは少し非科学的ですね。そいつは有害無益ですよ。もつと面白いことをお話ししませうか？　ティミリヤーゼフの植物の生活を読みましたか？　こんな言葉がありますよ。植物と動物は質的な相違でない。量的に異るだけである。つまり、科学的には、植物も動物も同じことだといふわけですね。こいつあいいぢやありませんか。極く没価値的な認識です。私の考へでは、植物とは精神分裂とアナロジーだと思ひますな。現代のホープですよ。植物は現代の神々であり、数多のヒステリー共が信者になつてそれに倣ふといふわけでせう。しかしそれはもう不純な認識だ。私にはティミリヤーゼフの定義だけでよろしい〔略〕

（三〇）

ここで言及されているのは、蘆田英治（前掲）や呉美妊（二〇〇九）[13]が指摘するように、ティミリヤーゼフ『植物の生活』（石井友幸〔訳〕、一九三四年四月、興学会出版）であり、その第九章「植物と動物」には次のようにある。太字は原文ママである。

植物及び動物の間の差異は質的なものではなく量的なものである。―種類ではなく程度である／斯様にして植物の生活に於ても亦動物の生活に於ても、その孰れかに特に限られた唯一つの性質も見出し得なかつたのである。

『植物の生活』は、改版されたものが一九四二年八月に慶應書房から「科学選書」として出された後、一九四七年七月には岩崎書店から「科学選書」として出されている。蘆田論文（前掲）は「『デンドロカカリヤ』の読みとどのようにかかわるか。本稿での追究が甘いことは認めねばならない」とし、呉論文（前掲）はレッドパージが念頭にあるとし、「植物園長がティミリヤーゼフを持ち出したのは、科学主義の中立性を逆に物質主義に基づいた資本主義の〈反共化〉の論理にしてしまうためだと考えられる」と指摘している。著者・ティミリヤーゼフ（Timiriyazev, Kliment Arkadievich）について、訳者・石井友幸は岩崎書店版の「序」で次のように紹介する。

原著者ティミリヤーゼフ（一八四三―一九二〇年）を簡単に紹介すれば、彼はロシヤの有名な植物生理学者で、植物の炭素同化作用の問題〔略〕の研究では世界的に名高く、またきはめて熱心なダーウィン主義者として、当時欧州に於けるハックスリーやヘッケルと同じやうな役割を、ロシヤに於いて果した人である。更に彼は、当時の帝制〔ママ〕下のロシヤに於いて、思想の自由のためまた大衆の解放のため、積極的に活動した進歩的インテリゲンチャの人としても

記憶されてゐる。／この邦訳書について一言すれば、これは十年ばかり前に翻訳、出版し、その後絶版になつてゐたものであるが、こんど岩崎書店主の好意（ママ）により新たに出版されることになつたものである。

また、科学史を専門とするダニエル・P・トーデスの著書、『ロシアの博物学者たち』（垂水雄二［訳］、一九九二年一〇月、工作舎）第八章には、次のようにある。

> クリメント・アルカデヴィッチ・ティミリヤーゼフ（一八四三―一九二〇）〔略〕にとって、科学と民主主義は、専制と苦痛に対する闘争において同盟をなすものであり、それゆえ彼は、自らの人生の目標が「科学のために研究し、人民のために書くことだ」と胸をはって述べることができたのだ。〔略〕ティミリヤーゼフはダーウィンの「ロシアのブルドッグ」であり、ダーウィン＝マルサス連関に対する彼の反応は、ロシアの通則に対する例外と、そのドラマティックな実例の両方を提供してくれる。

ティミリヤーゼフは、「思想の自由のためまた大衆の解放のため、積極的に活動した進歩的インテリゲンチャの人」（『植物と生活』）であり、「科学と民主主義」を「専制と苦痛に対する闘争において同盟をなすもの」（『ロシアの博物学者たち』）との考えを持つとみなされていた。それでは、なぜ『植物の生活』が素材として採用されたのか。それを考える手がかりとして、二つ挙げておきたい。

一つは、安部は日本共産党に一九五一年に入党しており、一九四九年の時点で日本共産党に接近している可能性があるということである。日本共産党との関わりとはどういうことか。例えば、寺田正「革命と科学者：ティミリヤゼフ（ママ）小伝」（『科学と技術』、一九四七年一二月）は、「ティミリヤゼフが開拓した植物生理学と生物進化理論は、ソヴェトの科学によつてりつぱに継承、発展されている」[14]とし、おおたけひろきち「じゃがいもの革命」（『新しい世界』、一九四九年一一月）は、「ロシアえだー（ママ）ウィンの進化論をつたえた偉大な生物学者」として「ティミリヤゼフ教授」を紹介する。これら雑誌の発行所は、いずれも日本共産党関連組織であり、前者は日本共産党出版部、後者は日本共産党出版局事業部である。もう一つは、この時期、安部がダーウィニズムに拠った書物に触れていたことである。例えば、一九五一年脱稿の「保護色」（前掲）は、パンネコック『社会主義と進化論』（堺利彦［訳］、一九四七年二月、彰考書院）を下敷きに書かれている。[15]これは「パンネコックのマルクス説とダアキン説との関係を論じた小論」として紹介されている。

翻って、『植物の生活』もその思想を養うための一環として読まれた可能性は高い。『植物の生活』の訳者・石井による「序」で確認したとおり、ティミリヤーゼフは「ロシヤの有名な植物

生理学者」であり、かつ「熱心なダーウィン主義者」であった。「H植物園長」はティミリヤーゼフの考えを支持し、「コモン君」に「気が落着」くから読むように、と促している。科学的見識を持つ人物を設定し、別の作中人物の見解を修正しようとする手法が用いられていると考えられる。

三　なぜ「デンドロカカリヤ」だったのか

最後に確認したいのは、本作のタイトルにもなっている「デンドロカカリヤ」である。「コモン君」が植物に変形する理由は、先行研究でも指摘されてきた[16]。しかし、「コモン君」が変形する植物として選ばれたのは、不特定の植物ではなく、デンドロカカリヤであった。デンドロカカリヤが選ばれたのはなぜか。まずは、デンドロカカリヤが、作中、どのように形容されているか確認しておこう。

語り手「ぼく」は、「コモン君」が変形した植物を「ぐにやぐにやした細い、緑褐色の、木とも草ともつかぬ」（九）と形容し、その「形は菊の葉に似てゐ」（二一）るとする。作品末尾でも同様の表現が繰り返されており、「菊のやうな葉をつけた、あまり見栄えのしない樹」（三一）として描かれる。ただ、語り手「ぼく」からは「デンドロカカリヤ」ということばは出てきていない。「デンドロカカリヤ」であることがわかるのは、「H植物園長」の発言によってである。「H植物園長」は、「コモン君」を見て「おや、デンドロカカリヤだ！」（二四）と言う。次の引用は、「H植物園長」が「コモン君」に宛てて出した手紙に書かれた記述である。

> デンドロカカリヤ殿――／いきなり、こんな呼び方をするのを許していただきたい。あなたがデンドロカカリヤであることは、あなた自身よりも私のほうが知ってゐる故、あえてこうお呼びする次第です。デンドロカカリヤ・クレピディフォリヤが小笠原の母島列島のみに産する極めて珍奇な植物であることを、貴方は御存じであらうか？　内地に於て貴方に巡り遇へたことは、私にとつてこの上もない悦びであります。そればかりか名誉でさへあります。思ふに貴方の血縁を逆上れば、さほど遠からず母島列島にその一端を見出し得るのではありますまいか？　（二九）

これらの記述から、デンドロカカリヤは、その学名が「デンドロカカリヤ・クレピディフォリヤ」[17]であること、「小笠原諸島の母島列島のみに産する極めて珍奇な植物」であること、「菊のやうな葉」を持ち、「ぐにやぐにやした細い、緑褐色の、木とも草ともつかぬ」と説明される。キク科の植物について、『日本国語大辞典』第二版（小学館）では、次のように説明される。

キク科キク属の植物の総称。多年草で、茎の下部は木質化する。葉は互生、卵形で縁は欠刻し、その間にさらに切れ込みがあり先端はとがる。茎頂に管状花と舌状花から成る頭花をつける。日本には、二十数種が野生し、その他に多数の園芸品種がある。

実際のデンドロカカリヤは、どうか。佐竹義輔ほか［編］『日本の野生植物』草本　Ⅲ　合弁花類（一九八一年一〇月、平凡社）「亜科と族の検索」の項目には、次のような記述が見られる。

A．両性花は稔る。花柱は棍棒状でなく、先は深く2裂する。／B．葉は互生。／C．子葉は2枚。／D．雌花は1列か、またはない。／E．花柱の枝の先は切頭、鈍頭、または3角状。／F．花柱の枝の先は切頭または鈍頭。／G．頭花は舌状花はなく、すべて筒状の両性花からなる。／H．多年草または木本。花柱の枝の先は短毛があるか、はけ状。／I．木本。葉は倒卵状長楕円形で全縁、両面無毛。花冠は淡紅紫色。そう果に白毛を密生する……／［略］ワダンノキ属　Dendrocacalia

末尾にある「Dendrocacalia」は、すなわち、デンドロカカリヤのことであり、「ワダンノキ属」と説明される。そこで、同書で「ワダンノキ属」および「ワダンノキ」を確認したい。以下の引用である。まず、「ワダンノキ属」は、次のように説明される。

小木で高さ1.5－4m、葉は互生。頭花は密散房状花序につき、すべて筒状花よりなり稔る。総苞は筒状で無毛、基部に小さい苞があり、片は5個あって1列。小花は5個、まれに3－4個、筒状の両性花で、先は5深裂する。葯下部は2裂。花柱の枝の先は切形で短毛がある。そう果は円柱形で長さ2㎜、切頭、白色の短毛がある。冠毛は長さ4－5㎜で、白色。1種があり、小笠原の特産属である。

さらに、「ワダンノキ」は次のように説明されている。

小笠原の母島にはえる。幹は高さ1.5－4m、上部でよく分枝し無毛、下部は径10cmに達し、樹皮は縦に裂ける。葉は常緑、長さ9－16cm、幅3.3－5.3cm、先は円く基部はしだいに狭まり、2－4cmの葉柄となり、やや厚い。総苞は筒状で長さ6㎜。花は淡紅紫色である。

整理しよう。デンドロカカリヤは、キク科ワダンノキ属の「小木で高さ1.5－4m」になり、「小笠原の母島にはえる」植物で、「葉は倒卵状長楕円形で全縁、両面無毛」（『日本の野生植物』）である。「全縁」とは、すなわち、「葉に鋸歯や刻みがなく滑らか」（『日

本国語大辞典』第二版）であり、これは、菊の葉の形状を示す「卵形で縁は欠刻し、その間にさらに切れ込みがあり先端はとがる」（『日本国語大辞典』第二版）と異なることは明白である。実際に、千葉大学萩庭植物標本データベースでは標本写真を見ることができる。[18]

「コモン君」が変形する植物として「デンドロカカリヤ」が選ばれた背景は何か。その理由として、一つは「キク科」であること、もう一つは「小笠原の母島にはえる」（『日本の野生植物』）ことがあったと考える。多くの先行研究が指摘するように、「菊の葉」が「日本」を想起させることを安部が意識していた可能性は高い。[19] ただし、デンドロカカリヤは「キク科」ではあるが、葉の形状は「菊」と異なるため、形態上の共通点から選ばれたわけではない。もう一つの「小笠原の母島にはえる」という点に関連し想起しうるのは、「米、小笠原の戦略信託統治要求か」（『読売新聞』朝刊、一九四八年二月二七日、五版一面）にあるように、小笠原諸島をめぐっては一九四五年以降に動きがあったことである。一九四五年一二月二三日、アメリカ合衆国は「日本帝国」の小笠原諸島に対する施政権の完全停止を宣言した。一九四六年一〇月にはGHQと外務省の連名で「帰島許可証」が出されるが、対象となったのはいわゆる「帰化人」と呼ばれた人々、その配偶者と子どもたちにかぎられた。[20] 一九四七年七月、帰島を許されなかった人々は小笠原島・硫黄島帰郷促進連盟を立ち上げ、帰島と再居住の権利を求めることになるが、「内地」出身者は一九六八年の小笠原・硫黄諸島の日本への「返還」まで帰島することは許されなかった。「デンドロカカリヤ」は、まさに小笠原諸島をめぐる議論が行われた時期に書かれているのである。なお、作中の「植物園」は、塚本裕一（一九九〇）[21]などの先行論が指摘するよう、現・国立大学法人東京大学大学院理学系研究科附属植物園がモデルと考えていいだろう。[22] 国立大学法人東京大学大学院理学系研究科附属植物園HP[23]によれば、一九三九年に「植物園本館」が「完成」したが、一九四五年には「戦災で温室、黒門、集会所、教室跡建物を完全焼失」している。ただし、川上幸男『小石川植物園』（一九八一年四月、郷学舎）によれば、「昭和七年に建てた」「半鉄骨の温室」は「戦災からも残り」「温室植物を保存することができた」。戦後二年後にあたる「昭和二十二年四月には温室の復活を計り（ママ）一部三七坪の旧温室の土台の上に木造で新築」された。ただし、川上幸男が「昭和になってからの植物目録は本格的なものがでていない」（『小石川植物園』第五章）と指摘するように、デンドロカカリヤがどこで育てられていたかは定かでない。例えば、田中康義「小石川植物園植栽樹木一覧表」（『日本植物園協会会報』、一九五五年三月）には、一九五五年二月時点の樹木の一覧が掲載されているが、「温室　苗床　鉢植の植物を除く」との但し書きがあり、デンドロカカリヤに関する情報は確認できない。一方で、東京大学理学部附属植物園［編］『小石川植物園温室植物目録』（一九四七年、発行月は不明）には、「COMPOSITAE キ

ク科」として、「Dendrocacalia crepidiforia Nakai　ワダンノキ　小笠原」との記録が残り、少なくとも「デンドロカカリヤ」が書かれた二年前の時点では育てられていたことが確認できる。作中、「コモン君」が「デンドロカカリヤ」として植物園に収容されるのは、「緑化週間」の期間においてであった。実際の日本では、一九四七年、「森林愛護連盟」が結成された。「〝荒れた国土を平和な緑で〟」というスローガンの下、「全国的緑化に乗り出したもの」[24]で、同年四月四日、「帝室林野局林業試験場で」「記念植樹」が行われた[25]。翌四八年には、「森林愛護、日本観光両連盟主催」で「全国に緑化運動が展開され」[26]た。緑化週間は、「デンドロカカリヤ」発表時の一九四九年の新聞記事によると、東京では「孝宮、順宮、清宮三内親王を迎え、GHQ天然資源局森林課カミングス、民間情報教育局教育課ネルソン両氏が出席、都下三千の中小学生が集つてNHK協賛の盛大な〝植樹〟祭を行」ったほか、「今年もアメリカから白とピンクのハナミズキの種が空輸され」「明年ごろにはこれらの苗木」が「日本全土にわたつて植樹される」[27]と記録されている。

おわりに

以上、「デンドロカカリヤ」の素材を検討してきた。「デンドロカカリヤ」の着想には、いくつかの要素が関わっていたと思われる。第一に、シュールリアリズムに関心を寄せていた安部が、三浦岱栄や杉田直樹の著作から「精神神経症」を学び、そこに「植物神経」が関わっていたことを学んだ。第二に、『神曲』地獄篇に「ピエエル・デルラ・ギイニア」が存在したこと。「詩文を能くし」た人物を配置することで、詩との決別を意識していたとも考えられる。第三に、ダーウィニズムに接近していたこと。そこからティミリヤーゼフを摂取したと考えられる。第四に、自宅近くの植物園にデンドロカカリヤがあり、それが小笠原諸島原産であったこと。小笠原諸島の島民が戦後に置かれた境遇も関わっていたと考えられる。第五に、一九四八年に「緑化運動」が展開されていたこと。緑化週間は、国を挙げての運動であったが、その活動はGHQにより管理されていた。「コモン君」は緑化週間の広告を「窓のすぐ下の電柱のビラ」として認識する。一九四九年三月二五日の『読売新聞』社説「醜悪な社会環境」[28]には、「電信柱その他に無秩序にひろげられて行く広告の廃止などに関した法規が準備されている」とあり、それを意識していた可能性もある。

「デンドロカカリヤ」は『表現』に掲載された後、改稿、一九五二年一二月に『安部公房創作集』（書肆ユリイカ）に収められる。その改稿の意図についても今後考えていきたい。

注

（1）作品末尾には、日付印「1948. 4. 20」が押されている。これについて、『安部公房全集』第二巻（一九九七年九月、新潮社）巻末「作

品ノート」は、安部が遺したノートの頁を参考に、詩「世紀の歌」の末に「1949. 3. 15」とあり、次の頁に「デンドロカカリヤ」の創作メモがあるため、「1948. 4. 20」ではなく「1949. 4. 20」が正しいとする。安部が埴谷雄高に送った一九四九年四月六日付書簡に、「今、「想像」のために、デンドロカカリヤといふ、人間が植物になる、奇妙な物語を書いてゐます」とあることからも、本作は一九四九年に脱稿したものと見るのが適当だろう。当該書簡は、『安部公房全集』第三〇巻（二〇〇九年三月、新潮社）に所収。

（2）田中裕之「『デンドロカカリヤ』論：《植物病》の解明を中心に」『国文学攷』、一九九〇年二月。

（3）「疾病への逃避」（**Flucht in Krankheit**）という語そのものは、例えば、今村新吉「ヒステリー」に就いて」（『日本医事新報』、一九二九年九月）で「**Freud** 学派の「疾病への逃避」なる熟語は茲に最も適切なる応用を出し得るのである」と紹介されるなど、一九二〇年代に既に見られるが、前掲『ヒステリイ』にも次の説明が確認できることは指摘しておきたい。第二章「「ヒステリイ」性性格異常」からの引用である。

> 例へば自分の厭な席へ出なければならない折には、急に腹痛又は神経痛等を発して臥褥し、外出不能となつて了ふ。斯う云ふ傾向をフロイト **Frend**（ママ）は「疾病への逃避」**Flucht in die Krankheit** と名けた（ママ）。

（4）蘆田英治「連続する「変貌」：安部公房論序説」『遊卵船』、二〇〇五年五月。

（5）糸賀寛「安部公房「デンドロカカリヤ」論：植物病と権力」二〇二四年九月一六日、京大近代文学研究会発表資料。

（6）佐々木幸喜「安部公房「大きな砂ふるい」とストリンドベリ」『京都大学國文學論叢』、二〇二四年四月。

（7）前掲『安部公房評伝年譜』。

（8）西脇順三郎・金子光晴［監修］『詩の本』第三巻　詩の鑑賞（一九六七年一一月、筑摩書房）。

（9）千葉宣一「詩人としての安部公房：『無名詩集』の世界」『國文學　解釋と鑑賞』、一九七一年一月。千葉は、安部の実弟・井村春光の友人であった。千葉によると、『無名詩集』と邂逅したのは「昭和二十四年の初夏」であり、その当時、「北大予科に在学中で」あった井村と「いっしょに詩誌の刊行を企画し」ており、安部を「文芸講演会の講師に招聘」することもあったという。

（10）鳥羽耕史『ミネルヴァ日本評伝選　安部公房：消しゴムで書く』二〇二四年七月、ミネルヴァ書房。

（11）ただし、この後も安部は小説の中に詩人を登場させており、詩への意識が垣間見える。その一例として、「バベルの塔の狸」（『人間』、一九五一年五月）がある。本作の語り手「ぼく」は「貧しい詩人」であるが、それと同時に「詩のことだけではなく、いろいろ科学的な発明についても考え」る人物としても設定されていることにも注目したい。なお、『安部公房全集』第三巻（一九九七年一〇月、新潮社）の巻末「作品ノート」によると、安部は『詩ノート』と題するノートに詩を書いていたようである。『生誕

１００年　安部公房　21世紀文学の基軸』（県立神奈川近代文学館・公益財団法人神奈川文学振興会［編］、二〇二四年一〇月、平凡社）では、その書影を確認することができる。

（12）ここには、フロイトのいう「懲罰欲求」（Strafbedürfnis）、すなわち、自らの罪の意識に見合うような罰を受けるべく行動する、という考えが現れているとも考えられる。「マゾヒズムの経済論的問題」（本間直樹［訳］、『フロイト全集』第一八巻、二〇〇七年八月、岩波書店）参照。「シュールリアリズム批判」には、フロイトの言説が引かれており、安部が強い関心を寄せていた可能性もある。引き続き検討する。

（13）呉美妊『安部公房の〈戦後〉：植民地経験と初期テクストをめぐって』二〇〇九年一一月、クレイン。

（14）この文章の続きには、ルイセンコ（Lysenko, Trofim Denisovich）の名が見える。生物学者・ルイセンコの学説は、鳥羽耕史（一九九七）が指摘するように、「第四間氷期」（『世界』、一九五八年七月―一九五九年三月）に素材として用いられる。鳥羽耕史「安部公房『第四間氷期』：水のなかの革命」（『国文学研究』、一九九七年一〇月）を参照のこと。

（15）佐々木幸喜「安部公房「保護色」の素材と方法：シュルレアリスムとマルクス主義理論の実践として」（『京都大学国際交流センター論攷』、二〇一六年二月）

（16）個性や個人の喪失とした栗山博子（一九九四）、戦前の記憶として存在するものと考える鳥羽耕史（二〇〇〇）、半植民地化を示すものとする斎藤朋誉（二〇一三）などがある。栗山博子「安部公房『デンドロカカリヤ』論」（『大谷女子大国文』、一九九四年三月）、鳥羽耕史「「デンドロカカリヤ」と前衛絵画：安部公房の「変貌」をめぐって」（『日本近代文学』、二〇〇〇年五月）、斎藤朋誉「初期安部公房の変貌：「デンドロカカリヤ」の生成」（『國學院大學大學院紀要　文学研究科』、二〇一三年三月）を参照のこと。

（17）デンドロカカリヤの学名 Dendrocacalia crepidifolia については、牧野富太郎・清水藤太郎『植物学名辞典』（一九五三年一月、和田書店）にも、属名の「Dendrocacalia」は「dendron 樹木＋属名。Cacalia」とあり、また、「Cacalia」の項には「kakos 悪＋lian 甚ダ」とある。李貞熙（一九九四）は、学名に着目し、「人間存在の内部に潜んでいる「悪」という意味作用がみつめられている」と読む。李貞熙「安部公房『デンドロカカリヤ』論：または、「極悪の植物」への変身をめぐって」（『稿本近代文学』、一九九四年一一月）を参照のこと。

（18）ただし、標本は二〇〇五年に国立科学博物館へ寄贈とのこと。URLは、http://opacll.chiba-u.jp/da/curator/search/simple?lang=0&mode=0&con_kywd=%E3%83%AF%E3%83%80%E3%83%B3%E3%83%8F%E3%82%AD&con_category=800121&req=search。最終閲覧日は二〇二四年一〇月三一日。

（19）「H植物園長」が「内地」（二四）と発言していることにも注意しておきたい。

（20）石原俊『近代日本と小笠原諸島：移動民の島々と帝国』（二〇〇七年九月、平凡社）第一〇章「終わらない占領経験」。

（21）塚本裕一「小石川植物園のデンドロカカリヤ」（『図書』、一九九〇年二月。後、『デンドロカカリヤ』異聞」と改題され、『漱石の白くない白百合』［一九九三年四月、文藝春秋社］に収録）参照。

（22）「小石川植物園」の名で知られる。前掲『安部公房評伝年譜』には、「真知夫人は油絵の制作のかたわら、新聞、雑誌などにカットを描き、さらに自宅で近所の児童たちに絵画を教えて、生活費にあてる。近くに小石川植物園があり、公房が執筆中の時は児童たちをつれてよく写生に出かけた」とある。安部公房と真知の結婚は一九四七年四月。小石川に関連する資料として、前掲『生誕100年　安部公房　21世紀文学の基軸』には、安部が弟・井村春光に送った葉書が載る。消印は一九四九年六月二〇日、「東京都小石川局区内」とある。

（23）URLは、https://koishikawa-bg.jp/overview/timeline/。最終閲覧日は二〇二四年一〇月三一日。一九四七年に、「東京帝国大学理学部附属植物園」から「東京大学理学部附属植物園」と改称。一九九八年に、現在の「東京大学大学院理学系研究科附属植物園」に改称。

（24）「花ときそう緑の一週間　全国的に植樹運動」『読売新聞』朝刊、一九四七年三月一九日、三版二面。

（25）国土緑化推進機構［編］『国土緑化運動五十年史』二〇〇〇年一二月、国土緑化推進機構。

（26）「一日から緑化運動」『読売新聞』朝刊、一九四八年三月三〇日、五版二面。

（27）「緑の週間　行事決る」『読売新聞』朝刊、一九四九年三月二四日、六版二面。

（28）一九四九年三月二五日朝刊、六版一面。

［付記］

本稿は、第三一回占領開拓期文化研究会（二〇一九年四月二一日、於　立命館大学）での口頭発表「安部公房「デンドロカカリヤ」の素材と構成」をもとに修正加筆したものである。引用は、特記したものを除いて初出に拠り、漢字は通行の字体を用いた。〔　〕内の注記および傍線は佐々木により、改行は「／」で示した。